

真のエリート教育 (アメリカ教育事情)

高部英明

昨年秋、京大の先生と夕食を共にした際、日本の初等・中等教育をいかに改革すべきか、私の考えを聞かれた。実は、彼が京大の学長から尋ねられているとのことで、学長は文部省から提言せよと言われていたとのこと。そこで、私の日頃考えている「現在のなべて平等の教育を改め、将来の日本を牽引する真の意味のエリートを選別し、最高の教育環境の下で育てるべきである」という主旨のことを、実例や経験談を交え説明した。もちろん、結果としてエリートから漏れた子供をどう教育するかについても述べた。京大の彼は「実は、私も似たような考えなのだが、もう60才近くなり、どうも自分の判断が時代とずれてきているのではないかと最近思うようになってきた。そこで、若い高部さんの意見を聞いたのです。自分の考えと近いことがわかり、自信を持って学長に進言できます」とのことであった。

最近、高級官僚という明治維新のときに意図された官僚育成学校・東大を卒業後、ぬくぬくとしてきた人たちの倫理感覚・庶民感覚の欠如、そして「エリートとしての崇高なる義務感」の欠如が浮き彫りになってきている。単に受験勉強という偏った能力のあるなしでエリートなどと思われては、日本は「歴史上、20世紀後半に、経済的な面だけで栄えた『日本』という国がかつて存在していた」と、将来、どこかの国の教科書に書かれるだけの存在になってしまうでしょう。

今や「大米帝国主義」とまで言われるアメリカ。単に軍事力だけでなく、経済も大変好調です。ビル・ゲーツに代表される個人の顔が見える経済興隆がアメリカの特徴です。アメリカが栄えているにはそれなりの理由があります。ここに、昨年10月、渡米した際、知人から聞いた米国教育事情を紹介しましょう。

小学校5年生から勉強は能力別。クラスと別に教科ごとに別々のクラスに分れます。特に、英・数は能力別にクラスが決まる。大学に入ろうとすると内申点の比重が重い。これは「SAT」という英・数中心のテストの点数と、高校での宿題提出率、これに加え、スポーツで活躍しているか、クラスの取りまとめ能力があるか、など勉強以外の能力が評価基準になる。知人の友人の子供で、一人はSATが満点だったが、結局希望するいい大学に行けず、もう一人の友人の子供はSATもいい成績だったが、クラスをまとめる力やスポーツも良く、MIT、Westpoint等から授業料免除で誘いがきた。

小学校から全国一斉のテストがあり、この平均点で学校のランク付けがなされる。従って、その学校のランクと、学校内での成績で絶対評価が可能となる。このテストの結果は新聞に掲載される。従って、ランクの高い高校の周りの土地代がこれに連動して高騰する。地価は、この全国一斉テストの結果で決まっていると言っても過言ではない。

天才児教育。天才的な才能を持って生まれた人を英語では「GiftedとかTalented」などと表現する。つまり「神様が特別のギフトを授けた子供」という訳である。米国ではGifted childを小学校2年の段階でIQ等から見分ける。そして、その子達のクラスを別に作る。普通の学校で平均5人くらいおり、その子達のための特別なプログラムが用意される。例えば、理科の実験で、レーザーを使って色の合成をさせたり、という高度なことまでやらせる。

とにかく、アメリカでは真のエリートはスポーツができ、ボランティア活動を行い、その上で勉強ができる子どもを示す。ただ、勉強ができるだけでは評価が低い。

さて、レーザー研の場合に関して考えてみましょう。会議、会議と、なべて教官・学生のレベルを平均化する組織形態になっていないでしょうか。これは、一人の超人的リーダーがいて、その人の号令下に皆が動く、と言う場合には機能しても、状況が変わると機能しません。かえって、個々の教官・学生の個性を伸ばす芽を摘んでしまいかねません。大切なことは、教官・学生がレーザー研の枠を超え、もっとレベルの高い議論の場に常に参加できる仕組みを作ることです。学生も若い内からレベルの高いものに触れてないと真の能力の開発ができません。

この意味で、物理学会の「レーザー核融合」のセッションは大いに問題があります。全体会議の延長のような、緊張感に欠ける学会など、参加する意味がありません。各自、自分で「学問体系の中における自分の専門はなにか、それを高いレベルで議論できるセッションは何処か」を見定め、分からなければ先生と相談し、「つるむ」仲間など不要ですから、一人乗り込んでいって下さい。最初は居心地が悪くても、何年か先、必ず貴方の世界は開けます。レーザー核融合の言葉にとらわれることなく、共に切磋琢磨できる人材を見つけだすことこそ、研究人生の醍醐味です。